浜・私・幼

横浜市幼稚園協会　協会報　No275

公益社団法人　横浜市幼稚園協会　発行
〒221-0055
横浜市神奈川区大野町 1-25
横浜ポートサイドプレイス　アネックス 5F
電　話　045（534）8708
http://www.kids-yokohama.or.jp
編　集　横浜市幼稚園協会広報部
発行者　木元　茂
印刷所　株式会社横濱大氣堂

◆ 第 56 回横浜市幼稚園教育研究大会

統一テーマ

『未来に向かって 子どもが主役の幼児教育を』

平成31年1月26日（土）　神奈川県立県民ホール　大ホールほか

平成 31 年 1 月 26 日 (土)、第 56 回横浜市幼稚園教育研究大会が神奈川県県民ホールの大ホール他で開催された。開会式、全体会は横浜市内の幼稚園、こども園の教職員のほか、保育園関係者、保護者、一般申込者など 2,400 人が参加して盛大なものとなった。

開会式では、運営実行委員長である木元茂 横浜市幼稚園協会会長より、「新制度の幼稚園、こども園での手当、処遇改善は勤続年数に応じた研修を受ける必要がある。それを各自で管理が簡単に出来るシステムがスタートする」と案内がなされ、次に「平成 27 年から始まったこども子育て新制度は第 2 期に入ろうとしている。市民ニーズ調査によると横浜市全体の 1 号認定相当、つまり 3 歳から 5 歳の教育時間帯の利用希望者は、これからの 5 年間で 1 万 2 千人減るという数値が出ている。一方で、2 号 3 号という保育の利用者のニーズは 9,000 人で増加するといわれている。短期間でこれだけの変化があることを知っておいてほしい。横浜市以外の他市町村では、大幅に園児、人口が減少している。だからこそ、保護者の負担を減らして子育てしやすいようにということで幼児教育、保育無償化という施策が出てきたのであり、この 10 月から始まる。

今まで量の拡大に重点を置いていた預かり保育も、市全体の 60％が実施するようになったので、今後は預かり保育を含めた園の保育内容の質が、保護者から選ばれることにつながってくる。さらに幼稚園での 2 歳児保育もはじまった。幼稚園が 2 歳児保育に取り組むということは、周辺に保育園を作り続けなくてもいいことになる。園の預かり保育の位置づけも含めてより一層充実し、真剣に取り組まなければいけないときが来たといえる。

このように考えてくると横浜市のほとんどの幼稚園が 0 歳～ 5 歳の乳幼児を幅広く幼稚園で保育するようになってくるので、全体会のような研修制度を堅持しながら、研修のテーマや内容は、現場の実態や先生たちのニーズを汲んで柔軟に対応していくことが大切であろう。」との挨拶があった。

続いて、来賓を代表し、荒木田百合横浜市副市長より祝辞をいただいた。同副市長は今大会の盛大な開催のねぎらいと「日々横浜の子どもたち、保護者の方々に真摯に向き合い、健やかな成長を支え、幼児教育の重大性を引き上げてくださることに感謝したい。自身も東京の幼稚園に通い楽しかった幼稚園の思い出が残っている」といくつかの例でお話しされた。また「10 月からは無償化が始まる。預かりの重要性や果たしてきた役割が国レベルで認められたということである。この度、5 年前から幼稚園協会と一緒に実施してきた大切な預かり保育の研修の成果が事例集として発行される。皆様の幼児教育への熱意が形になった。改めて幼児教育の質の向上につながる様々な取り組みに感謝したい。また昨年 1 月には子どもたち一人ひとりの良さと可能性をもたらす支援を実践するために、新規採用職員の研修を行った。また、乳幼児から幼児期、学童期の切れ目ない幼保小連携へも積極的な取り組みがされている。

今日は集大成の場である。2,400 人が参加と伺っており、力強く有難いと思う。」と述べられた。

※写真提供：株式会社 写真のワタナベ

横浜市幼稚園教育研究大会　全体会報告

預かり保育について

預かり保育事業担当者研修会の実施報告

講師／和泉短期大学児童福祉学科准教授
松山　洋平　先生
横浜市こども青少年局子育て支援部子育て支援課
幼児教育係長　眞子　里織　氏

続けて、横浜市私立幼稚園等預かり保育事業担当者研修会の実施報告が、講師の和泉短期大学児童福祉学科准教授 松山洋平先生、横浜市の子育て支援課幼児教育係長 眞子里織氏よりなされた。

▲実施報告を行う松山洋平先生

横浜市では横浜市幼稚園協会の協力を得て、預かり保育事業を平成９年に開設し、現在、市内幼稚園の約６割にあたる 187 園で実施している。

平成 30 年度の預かり保育担当者研修会では、先生方のいろいろな悩みやこんな保育がしたいという希望を踏まえた研修を行った。その報告を冊子としてまとめ発表した。

この預かり保育の研修が活きた形にしたいという熱い思いで、計画して振り返るということを考え研修を行った。１回目の７月は預かり担当の先生たちが集まり実態を共有し、それぞれどんな思いで保育にあたっているかグループワークを通して発表した。

そこから預かり保育で何ができそうか、やってみたいことを話し合い自分が実際にやってみたいことの企画書を作った。チャレンジしたいこと、どうしてそれをしたいのか、実現するためにはどういう方法が必要かなどを考えながら計画を立てた。

10 月には実際に計画したことをどのように実行したかを写真や資料を用いて、個人でドキュメンテーションを作り、報告しあうことをメインに行った。子どもの行った行動のプロセスを一緒に可視化し文字でも振り返った。どうしてそれを設定したか、具体的な実現方法はどうだったか、そして今後どんな可能性や課題があるかを振り返りながら、計画・実践したことを発表していく研修となった。

預かり保育担当者は、なんとなく居場所がないように感じたり、疎外感、孤独感もあり、担当者同士が共感する場が必要だった。今回の研修ではそれをどう高めていくかに取り組んだ。実際に保育を行っていくには園の協力がなければ難しいが、やってみたいことを形にするために、計画、実行、報告、記録しあうという往還型の研修を行ったことで手ごたえややりがいを感じ、先生方が実践を楽しく語る研修となった。

平成 30 年からの幼児教育要領改訂では預かりを通常保育とは切り離して考えるのではなく、幼稚園教育全体として計画を作成していくことが求められており、各園の保育の質を向上させる取り組みがこれからは更に必要になっていくことがよくわかる研修だった。

横浜市幼稚園教育研究大会　全体会報告

子どもが「いのち」に見える学校・社会

被災地の中学生たちと見つめた「いのち」

講師／和光大学現代人間学部身体環境共生学科准教授
（前・東松島市立鳴瀬未来中学校）
制野　俊弘　先生

▲講演を行う制野俊弘先生

最大の防災は人間が「いのち」に見えるようになること

生まれも育ちも宮城県。東京に出稼ぎにきています。保健体育教師歴２７年、「生活綴り方」という作文教育に取り組んできました。

「ひとがいのちにみえる」ということはどのようなことなのか実感を持って頂きたい。意味を考えたい。

「いのち観」が変われば「子ども観」が変わる。「子ども観」を持っていたつもりだったが、そこに震災で風穴が空いてしまった。

今「いのち観」に係る問題が学校で沢山おきている。これを変えない限り、いくら言葉で子どもたちを育てようと思ってもなかなか難しい。ここを今日は皆さんと考えようと思っています。

宮城県東松島市は建物用地の 65％が浸水し、人口 44,000 人の町で 1,109 名が亡くなり 24 名が現在も行方不明。学校は海から 200mほどの美しい松原の中にありました。

津波発生当日、どんな行動をとっているか見て頂きたい。足元に津波が押し寄せてからやっと避難の行動に入ります。防災については深く認識をしないと我々だけでなく、自分にとっての大事な人をなくしてしまいかねない。大きな教訓として心にとめて頂きたい。

生き残るということ

自分のせいで誰かが亡くなる。耐えられますか？自分は助かってそれと引き換えに誰かが亡くなったと思うと、なかなか想像できない。クラスに一人でもこういう子どもがいた時に教員はどうすべきかを常に考えておかなければならない。一人の幸せがない限り、全体の幸せはないと私はそう思って震災後教育をしてきました。

被災地には声なき声で叫ぶ子どもたちが沢山います。いくら嬉しそうな顔をしていてもそうではないのです。しかも子どもですからどんなことが渦巻いているか、ちゃんと対峙していかないと見えないのです。

現役の教え子では３名亡くなり身近な方も沢山亡くなりました。子どもたちはなぜ亡くなったのか？一番の原因は教育にあった。子どもたちが亡くなったのは我々の教育の責任。言葉では言ってきましたけれど、伝えきれていなかった。いのちの紡ぎ方、いのちの使い方。「大事なんだよ」言葉で言ってきましたが、でも本当の意味で教えきれませんでした。

震災で祖父をなくした子は流された自宅の跡地で語り部活動をしています。祖父が立っていた場所で「もし、あの時真っ直ぐ家にかえっていれば・・」何度も自問自答。いくつも「もし」を繰り返しながら祖父のいた場所で語り部を続けています。

心に傷を負った子どもや心に何かを抱えている子たちに見えている風景と我々が見ている風景や、感じる感覚は全く違います。これが教育の原点だと思うのですけれども、ふと忘れてしまうのですね。私は子どものことを知っているぞ、と思うこと自体不遜です。子どもが発する一言一言どういう意味があるかやはり考えて応答しないと足下を掬われてしまう。

「命とは何かを問う授業」へ

転校生のあみさんを紹介します。女川で震災に会い、生まれた町がなくなり、帰る所がなくなりました。父母もいません。小さな弟を守るため、母方の祖母と弟と暮らしています。クラスの子どもたちは、何も言わずに受け入れます。だから、彼女は打ちあけることができないまま、ずっと生活をします。でもやっぱり気づくのです、聞いてほしいことに。でも、弟が大きくなるまで泣かないと決心します。私は、見えない心にどう向き合うのか、また壁にぶつかりました。何とか言葉で解決しようとしますが言葉は無力です。

そこで、個別やチーム指導をやめて、行き着いたのが、作文を書かせることでした。作文を、みんなの前で読ませました。子どもたちは事情を知り、繋がりました。ある男の子は作文に、「知らないことは罪」と綴りました。

あみの心の中が分かったのは、ＮＨＫスペシャルの番組で、運動会でのあみが挨拶する場面からです。「私にとって心の復興というのは、震災で経験した辛い思いを乗り越えて次へ進むということです。後悔をあまりしないようにしました。」私はこの言葉が今でも気になっています。この言葉に彼女の矛盾というか大変さが表れていると思いました。後悔は、コントロールするものではないからです。私は彼女に、「人は後悔してもいいんじゃないの？」と言いました。その後、あみが書いた作文です。「両親が亡くなって、光が届かない暗闇に閉じ込められたようでした。私は、両親の方へ手を伸ばそうとします。しかし、全然届きません。届くことがないと実感していても、こんな悪循環をあの日から繰り返しています」。私は、気持ちをみんなに伝えたらいい、友達はきっと受け止めてくれると伝えました。作文をみんなの前で読むと、子どもたちが作文を書いてくれました。ゆうま君の作文には「ふとした瞬間に二人を思い出して、もういないんだなあと思うことがあります。それと似ているのかも知れません。僕が思うに、誰かに助けを求めてもいいと思います。簡

単には解決しないけど」と書かれていました。「そっと助けてやればいい」と書いた不登校の女の子もいました。

作文の授業は、自分の知らない自分の本当の姿を見つけます。子どもたちは、「いくら考えてもその人にはなれない」、「綺麗ごとばかり書いても意味がない」等、感じたことを書いてくれました。

《　最後に　》

命とは何かを問う授業には、答えがありません。点数や偏差値で答えのある教育になりつつありますが、問い続ける教育へ。答えがないと問えない教師から答えをともに探ろうとする教師へ。心に闇を抱えている子どもにとっては大事な教師です。

命の危機の共有体験を綴ることが、子どもたちの心を開きました。いのち観が変われば子ども観が変わり、子ども観が変われば教育観がかわり、教育観が変われば社会も変わります。そう念じて教育をやっている訳ですが、最終的に行き着いたのは、人に優しくなることです。誰でも、根源的な優しさを持っています。それを信じて引き出すことです。

日本に住む限り、「震災後」という言葉はありません。すべて「震災前」なのです。

普段の我々が平穏に暮らしているこの日常は仮の姿と思ってください。記憶の危機は、命の危機に直面します。皆さん、ぜひ記憶に留めてください。

ご案内
Information

※講演会の内容全文は、
横浜市幼稚園協会ホームページにも掲載しています。
そちらも是非ご覧ください。

http://www.kids-yokohama.or.jp

分科会報告

・特別研究委員会「1」
・特別研究委員会「2」
・特別研究委員会「3」
・鶴見支部
・中支部
・南支部
・旭支部
・港北支部
・瀬谷部

第1分科会　特別研究委員会「1」

テーマ　**主体的・対話的・深い学びって何？**
～何をやっているんだろう？に目をとめることから始めて～

講師　お茶の水女子大学こども園　園長　**宮里　暁美先生**　　会場　横浜ワールドポーターズ６Ｆイベントホール Ａ

今年度も第１分科会は特別研究委員会１の担当になりました。

横浜協会では、８月を除き５月から２月まで月に１回、横浜の幼稚園の教員が参加し、テーマに沿いながら参加者は自身の保育事例を持ち寄り、グループ内で子どもの姿や保育を語り合うことをしながら、講師である宮里先生に助言を頂き、また明日からの保育実践に活かしていく研究会を行っています。

特研１では５月からの研究内容を基に４人の先生の事例や思いを報告頂き、その後分科会に参加者もまたグループを作り、事例報告者の内容も含めながら自身の保育や子ども観を語り合う、そんな時間になりました。

私たち保育者は実践者です。ただ講師の話を聞いて良いお話だったで終わらせることなく、それをどう明日からの保育に活かせるか、実践と研究と往還的な関係の中で考えています。
（あけぼの幼稚園　樗木　元生）

第2分科会　特別研究委員会「2」

テーマ　「遊び」が「学び」になる保育環境を考える

講師　関東学院大学　教育学部こども発達学科准教授　**三谷　大紀先生**　　会場　ワークピア横浜 2F

子ども主体の遊びが豊かになる（学びになる）ためには「環境構成」の在り方が不可欠です。

特研２では年間を通し、環境の再構成を可視化するために、保育ウェブや写真などを用い、各園の事例を語り合ってきました。それをもとに参加者はポスターを作成し、研究発表大会当日はポスターセッションを行いました。

発表者は活き活きとした表情で発表を行う姿、参加者はそのポスターの内容を食い入るように見聞きする姿が印象的でした。

その場でポスター内容について意見を交換するなど、参加者皆から主体的に学ぶ姿勢が感じられ、とても充実した時間を過ごすことができました。

（幸ヶ谷幼稚園　木元　健太郎）

第3分科会　特別研究委員会「3」

テーマ　どの子にもうれしい保育の探究
～幼稚園教育要領等の改訂と、保育実践の方向性～

講師　玉川大学教育学部乳幼児発達学科教授　**若月　芳浩先生**　　会場　ワークピア横浜 3F

特研３では、研究会（年間９回）の前期を玉川大学教授、若月芳浩先生に助言講師を務めていただき、～幼稚園教育要領等の改定と、保育実践の方向性～について、講義やビデオ演習とグループディスカッションで３法令の改訂や「主体的・対話的・深い学び」のプロセスを大切にした保育実践を学び合いました。

後期は國學院大學教授、野本茂夫先生に助言講師を担当していただき、～どの子にもうれしい保育の探究～をテーマに講義やグループ討議を重ね実践知の学びを深めていきました。

この分科会でも「かかわりの難しい２人の子どもがいることによって起こった保育者の変化」の事例発表を基調として、参加者が 26 グループに分かれ「４つの視点」について語り合い特別支援教育の保育実践や環境整備について学びを深めました。（平戸幼稚園　小笠原　裕）

第4分科会　鶴見支部

テーマ　子どもの側から考える園庭環境
～子どもって環境からどんなことを感じるんだろう～

講師　鶴見大学短期大学部保育科准教授　**仙田　考先生**　　会場　横浜ワールドポーターズ６F　イベントホールB

子どもと環境とのかかわりは様々なかたちがありますが「今、子どもにとって必要な環境作りとは？」という問いかけに幼稚園の中で見近に感じられる園庭環境に焦点を絞り研修会を進め、その園庭とのかかわりから見えてくる子どもの姿を考えました。通年を通して鶴見大学短期大学部准教授の仙田先生にアドバイザーとして来て頂き、各園の園庭環境から季節・行事・或いは、子どもの発見や保育者自身の子どもの頃の遊びマップ等を作成し研修を重ねてきました。分科会では、支部研修の報告形式で行い、参加者とはポストイットを活用して共に子どもの生活空間である園庭環境を見つめなおす機会になったと感じています。

（橘幼稚園　三上　正芳）

第5分科会　中支部

テーマ　子どもの育ちを共有することを通した家庭支援
～ヴィジブルな保育記録の取組みを中心に～

講師　鎌倉女子大学児童学部児童学科准教授　**真宮　美奈子先生**　　会場　神奈川産業振興センター 14F

中支部では、保護者と共に子どもの育ちを共有することを目的に保育記録の取組みを行いました。「子どもに育っている姿は何か」を考え、それをもとに写真等を用いて、保護者が目で見て分かりやすい保育記録を作成し、改善、工夫した事例を研修の成果として発表しました。保護者にもコメントをもらい双方向で子どもの育ちを共有しました。後半はＤＶＤを鑑賞し、知識・技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力・人間性等の項目から保護者に伝えたい視点を捉え、参加者全員が保育記録の作成を行いました。講師の真宮先生からは、育ちの順序性の視点から生活習慣の確立、子どもの気持ちの受容、思考を促す関わり（言葉）が大切であることを伺い、改めて保護者と同じ眼差しの共有、連携が必要であると感じました。

（横浜みこころ幼稚園　福井　真理）

第6分科会　南支部

テーマ　**ペープサートをとり入れた豊かな保育**

講師　人形劇団ひとみ座劇団員・ひとみ座幼児劇場主宰人形劇俳優　**石原　ひとみ先生**　　会場　神奈川県民ホール　小ホール

南支部では４月より毎月ペープ人形をとり入れた保育を研究し、各園がお互いに発表しあってきました。当日は５園の先生が映像で紹介し、子どもたちがペープ人形を作ったり、演じたりしている様子を見ていただきました。後半は、研究委員全員で大型ペープサートを作って演じ、最後に講師の石原ひとみ先生に「赤ずきん」を演じていただきました。石原先生は「子どもたちの発想は自由で、プロの人形劇団が考える技術とは違い、本当に楽しくその発想には驚かされる。その自由をとり入れ子どもたちを生かしている先生方は素晴らしい。」とお話しされました。豊かな保育とは、環境を作り、発想を広げられるような言葉かけをして、子どもに共感すること。子どもたちの目が輝くような保育をすることだとこの研究を通して感じました。
（認定こども園山王台幼稚園・風の子こども園　田野岡　由紀子）

第7分科会　旭支部

テーマ　**遊びに没頭する環境作りを考えましょう**

講師　和泉短期大学児童福祉学科准教授　**松山　洋平先生**　　会場　神奈川産業振興センター 13F

「遊びに没頭する環境を保育者はどの様にして作っていくか」、また「そのような環境により見えてきた子どもたちの育ちとは何か」、これらの事について２つの事例発表を行いました。１つ目は、保育者が環境を整える事で好きな遊びが見つかったＡくんの事例。２つ目は、なかなか続かなかった年少の遊びも、長い目で見ると繋がっている事に気が付いた事例。事例を通して、保育者がその子に合った環境を整える事の大切さや、経験の重要性を感じる事が出来ました。その後は旭区支部研究会の参加者全員が発表者となってポスターセッションを行いました。最後には講師より、自分の園、他の園でも保育について語り合う風土づくりが大切だとお話を頂きました。　（横浜昭和幼稚園　矢田　裕之）

第8分科会　港北支部

テーマ　**仲間関係が育つ遊びの質とは**
～遊びを通して考える～

講師　玉川大学教育学部教授　**岩田　恵子先生**　　会場　神奈川県民ホール 6F 大会議室

「仲間になる」とは？友達と仲間には違いがあるのか、仲間関係を深めるには保育者は何をしたら良いのか等の問題意識をもって２年間研究してきました。事例を持ち寄り話し合う中で、遊びを充実させることが仲間関係を深めるのではないかという視点が生まれ、遊びを通して見えてきた事を各年齢のまとめとして寸劇と詳しい事例で発表しました。３歳児では一緒が楽しい！４歳児で安心できる存在となり、相手の良さを認めあおうとする、５歳児では同じ目的に向かって力を合わせ、仲間関係が深まっていくこと等々研究を通して学んだことを伝え、グループ討議では「仲間関係を感じる遊びはどんなものか」について活発な話し合いが行われ、実り多い時間となりました。　（日吉台光幼稚園　岩本　洋子）

第9分科会　瀬谷支部

テーマ　**オリジナル曲を作って子どもと歌おう**
～作曲ってかんたん？むずかしい？～

講師　倉橋音楽事務所主宰　**倉橋　孝先生**　　会場　横浜市教育会館 4F

瀬谷支部では、大正から昭和にかけてやさしく人の心の奥まで深く見つめた詩を残した金子みすゞの詩集から一編を選び個々が作曲をしました。講師倉橋先生の専門的なアレンジを経てできあがった曲とその歌を園で実践した様子を曲作りの経過と共に発表しました。各園の子どもたちが自分たちの先生の曲として親しみを持って楽しそうに歌う姿が印象的でした。倉橋先生から子どもの歌の歴史的変遷と作曲の仕方が紹介され、ポップで明るい歌に片寄らず、単調でしっとりとした雰囲気の歌も取り入れることの重要性が講義されました。倉橋先生の音楽を楽しむパワーに会場が巻き込まれ一緒に歌うことを通して、歌を歌ったり曲を作ったりすることに構える必要はないことを体感しました。
（横浜隼人幼稚園　水越　美果）

「片付け」を通して子育て・生き方は変わる

かたづけ mom 代表　片付けアドバイザー　小　関　祐　加

自分が片付けていないのに、子どもに『片付けなさい！』と叱っている人、手を挙げてくださ～い！
講演会でこう聞くとほとんどのママの手が挙がります。同様に親子参加の講座で声をかけると、隣に座った子どもたちはママの顔を見上げ「ほ～ら！」と勝ち誇ったような笑顔になります。このように、どんなに小さな子どもでも「ママだって片付けていないのになんで怒るの？」と不満や疑問を持っているものです。子どもを叱る前に、まず「大人の出しっぱなし」をなくすところから始めましょう。

片付け・収納というと、細かく分類してラベリングしてと考えがちですが、細かな分類はおすすめしません。あくまで個人的推測ですが、

①どんなに忙しくてもきちんと片付ける人＝1 割
②片付いていなくても全く気にならない人＝2 割
③片付けなきゃと思っているけれど後回しにしてしまう人＝7 割

と考えています。①の人の家族はたいてい②か③です。①の人が考える細分化された引き出しは、②③の人には面倒で片付けられません。「自分は片付けが得意なのに子どもができない」と嘆くケースの原因はここ。①の人は自分が「1 割の特別な人」だと認識し、②③の人でもできる後述の収納方法にシフトしてください。③の人は実は根が几帳面で完璧主義。「きちんと収納しないくらいならやらない」となり、結局片付きません。是非頭を切り替えて「やらないより雑でもいいからやる」とおおざっぱな分類から始めてみてください。「見せる収納」で失敗したら「雑でもいいから見えない所にしまう」で良しとしましょう。

「おままごと（たべもの）」「おままごと（おなべ）」など細かなラベリングをしている家の方が片付いておらず、「おままごと」というラベルの家の方が片付いている事が多いというのもよくあるケースです。年少さんでも幼稚園では周りの目や緊張感があるので、きちんと分類どおりに片付けようとしますが、家では緊張感がないのでできなくても仕方ありません。まずはおおざっぱな分類にして「元にもどしやすく」してみましょう。

皆さんも幼稚園のお便りやチラシなど「今は分類通りにしまうのが面倒だからあとで‥」とテーブルの上に放置していませんか？それなら分類通りでなくても、とりあえずファイルボックスに立ててテーブルの上を片付ける方が生活しやすいはずです。ファイルボックスに入れると忘れるから、と躊躇する方もいますが、テーブルの上で他の物にまぎれて忘れるよりましです。片付けは「元にもどせるか」「継続できるか」がポイント、「やらないよりは雑でもいいからやる」と考えましょう。

また、見た目のよいフタ付きのゴミ箱をリビングに置いているのに、テーブルや床にゴミが落ちていることがよくあります。家族にきちんと捨てさせたければ、

プロフィール【小関 祐加】

「かたづけｍｏｍ」主宰。
専業主婦を経て地元中心に活動の後、2007 年「かたづけ mom」を立ち上げる。
11年間で 450 軒以上のお宅を訪問、一緒にお片付けしたのは延べ千数百日。講演回数は約 500 回。社会人・大学生となった子どもの育児経験を踏まえ、どの年代のお子様・ご家族にも対応したアドバイスを実践。

フタのない口の大きくあいた（2 メートル離れた所からでもゴミが入りそうな）タイプを選んでください。どうすれば家族が片付ける気になるか、そこを考えてみましょう。

私がこの仕事を始めたきっかけは、床が物だらけだったママ友さんのお宅を片付けていくうちに、お子さんの表情がみるみる明るくなり親子関係も変わっていくのを目の当たりにしたことでした。部屋の環境は子どもの成長や親子関係に影響します。決しておしゃれで美しい部屋である必要はなく、小ぎれいであれば十分。ほっとできる空間にしてください。

この十年でフルタイムの共働き家庭が非常に増えました。①の人は仕事をしていても片付いた空間を維持できますが、③の人は仕事を始めると家の中は大変な状況になり、そのしわ寄せは子どもにいきます。いつか仕事を始めようと思っている人は、まず子ども目線でお部屋の環境を整えること。そうすれば子どもは自分で身支度を調えられ、ママの負担も減り気持ちに余裕が生まれます。ワークライフバランスは「子どもがいても仕事をするにはどうするか」ではなく「仕事を始めても子どもと今まで通り向き合うためにはどんな工夫が必要か」を考えてみましょう。

そして、専業主婦のママたちももっと自信を持ってください。「専業主婦なのに家が片付いていなくて」と落ち込む必要はありません。家にいる時間が長ければおもちゃや物の出入りは激しく片付けが大変になるのは当然。家事・育児は自給換算では測れないところに苦労や愛があることを、もっとアピールしてよいのです。「女性の活躍」は「家の中での活躍」も含まれます。家を一歩出れば、ニュースに触れれば、社会ともしっかりつながっています。家事・育児に専念したいママも働くママも両方が輝いてほしいと願っています。

いつも 2 時間の講演ではお話しし足りないくらいで、最後にはいつも超早口。育児・家事をポジティブにこなすコツなど、ここで皆さんにお伝えできなかったことをいつかどこかで直接お伝えできますように！

子育て教育相談室より

心の窓をひらいて

横浜市幼稚園協会　子育て教育相談室相談員　　大森 由紀

新しい年が明け、新しい年度を迎えようとしています。みなさん、いかがお過ごしですか。幼稚園では新しい年度に向け、みんなでお教室の大掃除をしている頃かもしれませんね。きれいに磨かれひらかれた窓からは、いつもと同じ景色もちょっと違ってみえることでしょう。お子さんの、心の窓もひらいてみませんか？

心理学に『ジョハリの窓』と呼ばれる自己分析の方法があります。他者との関係から自分をとらえ、自分のいろいろな側面を４つの窓に分類して理解し、そこで得られた気づきをコミュニケーションに生かしていくというものです。アメリカの心理学者であるジョセフとハリーが二人で共同研究したことから“ジョハリ”と名付けられました。

４つの窓とは、自分が知っている（あるいは知らない）自分と、他人が知っている（あるいは知らない）自分の組み合わせから出来ており、

- 一つ目の窓は、自分が知っている／他人も知っている自分で“開放の窓”
- 二つ目の窓は、自分は知らない／他人は知っている自分で“盲点の窓”
- 三つ目の窓は、自分は知っている／他人には見せていない自分で“秘密の窓”
- 四つ目の窓は、自分は知らない／他人も知らない自分で“未知の窓”と呼ばれています。

例えば、最近流行りの SNS。そこに投稿され公開されている事柄というのは、その人にとって自分が了解していて他人にもオープンにされている、いわば“開放の窓”ですね。また、これまであまり他人には見せてこなかった意外な一面を載せるとき、それは“秘密の窓”を周囲に向けて開けて“開放の窓”にするような感覚かもしれません。

さて、幼児期のお子さんについて考えてみましょう。この時期の子どもたちというのは、自分自身の興味あること・関心ある事柄が心の大部分を占めています。自分全開で過ごしており、そこに他者の視点はありません。でもそんな子どもの興味に寄り添い、行動を共にしてみると、「へぇ、この子はこんなことに興味があるのか～」という気づきや「わっ、この子にこんな一面があったのか！」という発見がありますよね。

お母さんたちには、ぜひ、このような気づきや発見を、言葉にしてお子さんに伝えてあげてほしいと思います。「あなたはこんなことに興味があるんだね」という言葉をかけられた瞬間、それまではただ自分の興味だけだった世界が“自分が知っている／他人も知っている”ものとなり、お子さんの“開放の窓”が開けられることでしょう。「あなたにはこんな一面があるんだね」という一言が、お子さんの“盲点の窓”を開き“開放の窓”にするきっかけになるかもしれません。

３才から５才というのは、自分の興味関心が心の大部分を占めていた時代から、自分を真ん中に置きながらも自分や自分の周りの人や出来事をとらえられるようにと育っていく時期です。その先の豊かな人間関係に向けて、周囲の大人のあたたかい言葉に彩られて、子どもたちが外の世界へ心の窓を開けていけることを願っています。

でも、もしも開けるにはちょっと手強い窓だったら、その時はどうぞお電話ください。“未知の窓”にはどのような可能性が眠っているかわかりません。一緒に鍵をみつけましょう。

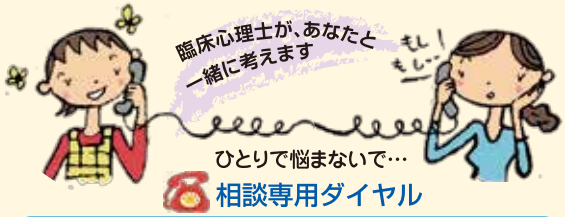
子育て教育相談室

【相 談 日】

毎週**火**曜日・**金**曜日（年末年始、祝祭日を除く）

【受付時間】

10時～12時　　**13時～15時**



相談専用ダイヤル

045-534-8837

公益社団法人　横浜市幼稚園協会
http://www.kids-yokohama.or.jp
TEL 045-534-8708

編集後記

平成も残すところ数か月となりました。ＴＶや雑誌などで平成を振り返る特集などを目にする機会も増え、新しい時代の訪れを感じます。

子どもたちが新しい時代と共に成長を続け、将来、その時代を担うホープとして活躍している姿に思いを馳せた時、あらためて幼児教育の大切さと責任の重さに気が引き締まる思いでおります。

新しい時代が平成と同様に平和な時となり、できることなら災害の少ない穏やかな時となってほしいと心から願っています。

広報部　　武田　敦子